

このコラムでは、ウガンダに対する支援としてインフラなどの経済開発、難民関連、農業、人材育成などの取り組みを紹介してきました。今回は野生動物の保護に関する支援をご紹介します。

貧困問題や基礎教育の問題、また流入を続ける難民対策などの難題を抱える中で、なぜ動物保護なのかとの指摘もあり得ると思います。アフリカにおいても急速に都市化が進み、開発が進んでいます。人間の活動が増えれば、相対的に野生動物の棲家は狭まっていくという現状があります。アフリカでも国立公園が整備されています。しかしこれも人間の居住地域が拡大し、野生動物は公園の方に棲家を追われていったというのが現実のようです。持続可能な環境の実現の観点からは、野生動物の保護も待ったなしの課題の 1 つだと私は考えます。

ウガンダもこのような考えに沿った対策をとっており、そのための施設もあります。

ウガンダでは 1952 年の植民地時代にエンテベ動物園と言われる施設が開設されました。当初は傷ついた野生動物の保護のための施設でした。60 年代になるといわゆる伝統的な動物園に衣替えします。国民にも人気の施設です。1994 年になり、伝統的な動物園から動物の保護、また国民への啓発の観点から信託基金が設置され、名前もウガンダ野生動物保護教育センター(以下、保護センター)となります。さらに近年は首都に近いエンテベだけでなく、地方都市にも同じような施設が開設されています。

日本は 2008 年に横浜でアフリカ開発会議(TICAD)が開催された時、地元にある横浜動物園とエンテベ動物園との交流が始まりました。現在、保護センターには、日本から 2 名の方が活動しておられます。

お一人目は、JICA 海外協力隊の水野浩子隊員(職種:動物学)です。保護センターでは、効率的で目的に合った飼育方法や飼育環境の改善が急務です。また、地方でも新設される新しい施設への支援のための人材も不足しています。水野隊員は 2023 年 10 月から今年の 6 月までの任期です。

水野隊員は獣医さんです。保護センターを訪問したところ訓練しているワシと共に出迎えていただきました。日本の鷹匠のイメージですね。またフクロウも飼育しています。アフリカではフクロウは不吉な鳥とされ、不幸をもたらすものと広く信じられています。このため、野生のフクロウは住民にいじめられている例が多いそうです。日本では野生のものは滅多に見かける事はないと思いますが、森のフクロウと言えば知恵があって、夜寝ずに見守ってくれるといったポジティブなイメージが多いように思います。水野さんは保護センターで動物の馴致訓練技術と栄養管理の指導を行っています。保護センターにはウガンダ全国から小中学生が見学に来ます。これらの見学者にワシが飛行するところを見せたり、またフクロウの柔らかい羽毛に触るなどして、と

でも可愛いイメージであり(実際そうです)、また、実際ネズミなどの害虫を駆除してくれるありがたい存在であることもアピールしています。これらにより長い目で見て、一般の住民と野生動物が共生でき、互いに裨益できる存在であることを浸透させようとしています。



〔フクロウ〕



〔ワシの飛行訓練〕

2人目は JICA 草の根技術協力プロジェクトのコーディネーターとして中部大学から来られている鎌田朱美さんです。ウガンダには数多くの野生動物がいますが、同時に絶滅危惧種の動物も多いのです。アフリカに生息する鳥のうち半分以上の種類はウガンダで見ることができるそうです。ウガンダは小さな国ですが、生物多様性に富んでいます。

鎌田さんは、絶滅危惧種でオウムの1種であるヨウム の保全に取り組んでおられます。

ヨウムはウガンダ全土で普通に見られる鳥でしたが、おとなしくて赤いしっぽが特徴的なオウムの1種であり、ペットとしての人気が高いのです。絶滅危惧種としてヨウムはワシントン条約上取引が禁じられていますが、密猟者があとをたちません。鎌田さんが保護センターに赴任した時も、ちょうど100を超えるヨウムが密猟者の手から保護されたところでした。いきなりたくさんのヨウムに囲まれたのは良かったのですが、これだけの数を再度飼育して自然に戻すのは容易ではありません。赴任早々の難題でしたが、保護センターの職員と協力して何とか乗り切ったそうです。今ではヨウムの保護、飼育のための教育棟も完成しました。鎌田さんのプロジェクトの実施期間は2022年3月から2026年5月までとなっています。



〔ヨウムのキャラクター〕



〔病院施設〕

ウガンダでは、自国の経済発展のための主要な業種をいくつか国が定めています。観光はその一つです。例えば、ルワンダとの国境地帯に生息するマウンテンゴリラは、世界の約半数がウガンダに生息しているとされ有名です。欧米から多くの観光客が野生動物を見学しにやってきました。いわゆるエコツーリズムです。しかし、持続可能な発展のためには一般住民の啓発や業者のトレーニングが必要です。鎌田さんは保護センターの職員と連携しながら、このような息の長いプロジェクトに意欲的に取り組んでいます。

保護センターのウガンダ人職員は、日本の各地の動物園で研修などを行ってきた方が多いのに驚かされました。旭川動物園や横浜動物園、また名古屋市東山動植物園、富山市ファミリーパーク、豊橋市総合動植物公園、沖縄県国頭村やんばる野生生物保護センター、兵庫県立コウノトリの郷公園などにいかれたこともあるそうです。日本の動物園も有名なものが多いと思いますが、アフリカの経験も日本の専門家にとっても有益なのではないでしょうか。このような分野では、日本が一方向的に相手国を支援するのではなく、日本の専門家にとっても有益な知見が得られるのではないかと考えています。

2、日本のNGOの活躍

このコラムを始めた2024年6月の最初の話題は、6月20日の「世界難民の日」にウガンダ西部のライノ難民居住地を訪問したことでした。今月は同じ西部でもアルバート湖に近いチクベ県チャングワリ難民居住地を訪問しました。日本のNGOである「難民を助ける会(AAR Japan)」が、5年間にわたり難民支援を行っている地域です。その活動の一環として、今回チャングワリ中等教育学校的女子寮が竣工し、その開所式に出席してきました。

昨年末からウガンダにやってくる難民の数は残念ながら増加傾向にあります。ウガンダ政府及び国連機関によれば、その数は昨年末に176万人を超え、180万人到達が目前です。チャングワリ難民居住地は、主にコンゴ民主共和国からの難民が居住

しており、その数は 14 万人を超えます。日本政府は同居住地に継続的に支援を行っており、2008 年には草の根・人間の安全保障無償資金協力で学校4校の教室棟の建設、2018 年にはチャングワリ中等教育学校に化学実験棟を建設しています。

ウガンダの難民居住地は、鉄条網で区切られているわけではありません。難民は地元民と共存しており、今回訪問した学校も難民の生徒と地元の生徒双方を受け入れています。校長先生は 10 年以上校長を務めておられます。今回の訪問では、化学実験棟の建設に改めて感謝を示していただきました。また嬉しいことにこの化学実験棟で学んだ卒業生がウガンダ一番の大学であるマケレレ大学を卒業し、先生として戻ってきたとのこと。息の長い支援が大事だと改めて思いました。

AAR Japan はチャングワリ居住地及びその地域周辺で子どもの保護環境改善事業に取り組んでいます。今回の学校施設の整備のほか、コミュニティ・リーダーの人材育成、組織の能力強化、また子どもが抱える問題を早期発見、対処できる体制を整える活動に取り組んでいます。

AAR Japan の活動で特に心に残ったものがあります。それは中・高生を中心に子どもたち同士で助け合う「Peer Support Club」の活動です。故郷を離れ隣国の難民居住地にやってくる子どもたちは、それぞれとても困難な事情を抱えています。片親または両親が命を落とした子ども、避難する道中で耐え難い苦難を経験した子ども。ほとんどは自分の体験を語ろうとはしません。心は閉ざされたままです。そのような状況を少しでも改善しようとお互いのことを話し合い、また毎日の活動を自発的に支え合うグループの設立をサポートしたとの事でした。女子寮の開所式では、お揃いの T シャツを着て歓迎の歌とダンスを披露してくれました。

日本大使として難民居住地でスピーチをする機会は今回が初めてではありません。私は日本としては難民となった人たちに、まずは目の安全(safety)を、そして人間としての尊厳(dignity)を提供したいと話します。そして何よりも大切なこととして将来に対する希望(hope)を見出すことを支援したいと述べることにしています。しかし、これは簡単なことではありません。AAR Japan の皆さんはこれを現地で実践しておられます。この度、広本充恵さんは日本に戻ることに、交代にタジキスタンから長野峻典さんが赴任されました。秋山広輔さんは2年目になります。



〔PEER SUPPORT CLUB〕



〔開所式〕

この機会にウガンダで活躍する日本の NGO の皆さんについて紹介したいと思います。

今回紹介させていただいた AAR Japan のほか大使館として把握している団体は 13 に及びます。日本人で活躍するメンバーは駐在員だけで 14 人(当館調べ、2025 年 2 月 1 日現在)になります。カンパラに事務所を構える団体もありますが、多くが地方に拠点を持ち地元住民と協力しながら支援活動を行っています。これら日本の NGO 活動の連携をさらに強化してより一層効果的な活動が行えるようにこの度 2 月 21 日に日本 NGO 連絡協議会が設立されました。互いの活動の実態について情報交換し、より効果的なアプローチについて話し合う機会が増えることを期待したいと思います。日本大使館も JICA の他 NGO とも連携しつつ支援を充実させていきたいと思っています。

(日本 NGO 連絡協議会参加団体一覧)(順不動)

所属団体	当地活動歴	国別事業展開計画
(特活)道普請人	2019 年～	社会インフラ開発分野
(公社)セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン	2010 年～	医療・保健分野 レジリエンス強化分野
(特活)ワールド・ビジョン・ジャパン	1960 年代～	難民・ホストコミュニティ支援分野
(特活)ピースウィンズ・ジャパン	2016 年～	農業分野
(特活)難民を助ける会	2016 年～	難民・ホストコミュニティ支援分野
(特活)地球のステージ	2023 年～	難民・ホストコミュニティ支援分野
(一財)ササカワ・アフリカ財団	1996 年～	農業分野
(特活)テラ・ルネッサンス	2005 年～	
(特活)栄養不良対策行動ネットワーク	2023 年～	西ナイル栄養改善生計向上プロジェクト
(特活)Global Bridge Network	2016 年～	その他個別の案件
(特活)ハンガー・フリー・ワールド	2001 年～	
(特活)五条クラブ	2021 年～	
(特活)なかよし学園プロジェクト	2019 年～	

3. 天皇誕生日レセプション

2 月 20 日、カンパラの日本大使公邸において今年の天皇誕生日レセプションが開催されました。ウガンダの方、在留邦人の方、国際機関や外交団など 300 名近い方々の参加を得ることができました。

ウガンダ側からは、来賓としてウガンダ外務省のオケロ国务大臣がお見えになり祝辞をいただきました。

レセプションでは、まもなく完成するカンパラ・フライオーバーの事業の模型が展示されました。また今月 14 日に無償資金援助の供与が決定された新カルマ橋の完成予想映像が流され、大変な関心を呼んでいました。

レセプションではカンパラでも近年人気が高まっている日本食を提供。会場で寿司、焼き鳥の調理のパフォーマンスを喜んでいただきました。また天ぷらにも舌鼓を打っていました。日本酒も産地を示しながらご提供したところかなりの関心が示されていました。

ご来場いただいた皆様に感謝です。



〔主賓との記念撮影〕



〔大使挨拶〕



〔カンパラ・フライオーバー模型〕



〔会場・ゲストの様子〕

（以上）